

女子大学における薬物乱用防止教育講座実施に関する研究

松本 禎明

九州女子短期大学専攻科子ども健康学専攻 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2017年11月1日受付、2017年12月8日受理)

要 旨

薬物乱用問題は我が国における喫緊の課題である。この問題解決のために、国の各省庁は独自の動きに加えて、連携もしながら多様な対策に取り組んでいる姿勢が強く感じられる。特に、文部科学省はこの問題解決に向けて初等中等教育機関で学ぶ児童生徒に加え、高等教育機関で学ぶ学生への啓発を重視するようになってきている。

また、近年女性の職業能力開発を意識した大学進学率の向上が影響しての社会進出が加速し、女性が男性と対等或いはそれ以上の地位につき活躍をしている場面も増えている。

そこで、本研究では社会の一員としての女性の地位向上に鑑み、社会問題化している薬物乱用問題について、女性ならではの視点から保健衛生上の危害を防止するために果たす役割は極めて大きいと考え、高等教育機関である大学学部で学ぶ女子学生を対象に薬物乱用防止教育講座の実施と意識調査を行うことにした。

講座では、大麻、覚せい剤、麻薬及び危険ドラッグなどの種類と依存性、国内外の事犯例をスライドで紹介し、動物実験風景の動画放映を行った。講座終了後の意識調査で、従来からの興味関心の程度、受講の有益性、今後の学習意欲及び身近な人への注意喚起姿勢の4項目について書面調査を実施した所、すべての項目で肯定的意見が多かった。特に、今回の講座の受講の有益性については極めて高い評価が得られ、身近な人への注意喚起姿勢についても高い積極性がみられた。

薬物乱用問題については、それをどのように意識し防止に繋げるかは人それぞれ温度差があることは否めないが、男性にはない着眼点や洞察力をもって女性がその危害防止に貢献していくことの重要性は益々高くなっていくものと考えられる。そのためにも、職業能力を身につけようとする最終段階である大学学部教育の中において薬物乱用防止に関する専門性を培うことは極めて重要である。

1. 緒言

薬物乱用問題に係る事犯は、いつまで経ってもなくならないという非常に憂慮すべき事態が続いている。この問題の解決について、内閣府、警察庁、厚生労働省及び文部科学省はこれまで縦割りの対策を講じてきたが、近年はこれらの省庁が一体となって取り組んでいる¹⁾ようである。薬物乱用防止教育は、学校教育において初等中等教育課程の中で定例的行事と

して展開されている²⁾ことが多い。しかしながら、大学学部などの高等教育課程においては、文部科学省によるポスター発行³⁾の動きはあるもののその実施状況は判然としない。それは、大学の学部学科等の場合、その専門性が細分化され一定の学術的特性のある集団が形成されることやその規模を含めた環境も多様であることが関係しているものと考えられる。

近年、女性は家庭を守るというだけでなく、大学などの高騰教育機関で、職業能力を身につけた上での社会進出と地位の向上が際立ってきている。それに伴ない女性が社会の中で薬物乱用問題など保健衛生上の危害を防止するために男性にはない視点や洞察力をもって貢献することは極めて大きな意義がある。

そこで、職業能力を開発する目的で大学学部で学ぶ2年生を対象に薬物乱用防止教育講座をキャリア教育の中で展開し、その後に薬物乱用防止に関する意識調査を書面調査で行い分析評価並びに今後の展望について考察することとした。

II. 方法

九州の中堅都市の中堅高等女子教育機関である私立X女子大学の理系の学士（家政学）領域学部と文系の学士（文学）領域学部で学ぶ2年生全員、合計278人（学部人数割合は前者4割、後者6割程度）を対象に全学共通必修科目であるキャリア教育の通常授業の中で薬物乱用防止教育講座約70分とその後薬物乱用防止に関する意識調査を平成28年9月19日に行った。なお、講座実施者は著者で、プロフィールは医療保健系教育職員（薬剤師免許所有）である。

1. 講座の内容

- ① 昨今、覚せい剤所持とその使用に関する事犯の報道が相次いでいることから、国策として覚せい剤が販売されていた過去の歴史とその後それが規制されるようになった背景と経緯を導入で解説。
- ② オリジナルで実験し製作した小動物による異常行動の様子を動画で紹介。
- ③ 国内外で頻発する薬物事犯例を紹介。
- ④ 覚せい剤、大麻、麻薬、危険ドラッグ、医薬品、シンナー及び酒などの法令規制を解説。
- ⑤ 薬物問題の社会、家庭などの背景の可能性を解説。
- ⑥ 酒の人体へ及ぼす影響を解説。
- ⑦ これからの薬物乱用防止教育に求められるものについて、身近に存在するリスクとして学校教育の果たす役割が大きいことを指摘。

2. 書面調査事項

質問1. 薬物乱用問題について、従来から興味関心は高い方でしたか。

- ①強く思う ②まあまあ思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない

質問2. 今日の講座を受講して、薬物乱用問題について新たな発見があり、理解が深まりましたか。

①強くそう思う ②まあまあそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない

質問3. 今日の講座を受講して、大学在学中にもっとこのような講座での学習をしたいと思われましたか。

①強くそう思う ②まあまあそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない

質問4. 今日の講座を受講して、身近な周囲の人に薬物乱用問題について注意喚起をすることができるようになったと思いますか。

①強くそう思う ②まあまあそう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない

質問5. 薬物乱用防止の意識を高めていくための提案や所見がありましたら下にご自由に記述ください。

3. 書面調査に関する倫理的配慮

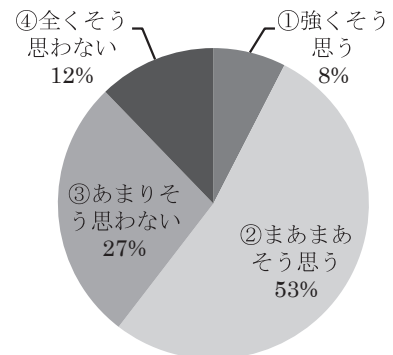
書面調査は、キャリア教育を運営する組織の審査と許諾を得て実施した。記入は自由とし、個人が特定されないよう配慮した。

III. 結果

薬物乱用防止教育講座の受講生は278人で、書面調査の回収率は100%であった。質問1から質問4までの調査結果は次の通りで（ ）内に回答割合と実人数を記した。質問5の回答の自由記述は原文趣旨をできるだけ生かして表現した。

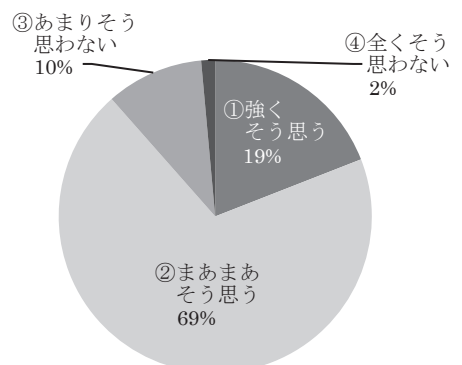
質問1. 薬物乱用問題について、従来から興味関心は高い方でしたか。

- ①強くそう思う (8%、21人)
- ②まあまあそう思う (53%、147人)
- ③あまりそう思わない (27%、76人)
- ④全くそう思わない (12%、34人)
- ①+②の肯定的回答 (61%、168人)
- ③+④の否定的回答 (39%、110人)



質問2. 今日の講座を受講して、薬物乱用問題について新たな発見があり、理解が深まりましたか。

- ①強くそう思う (19%、53人)
- ②まあまあそう思 (69%、193人)
- ③あまりそう思わない (10%、28人)
- ④全くそう思わない (2%、4人)



①+②の肯定的回 (88%、246人)

③+④の否定的回答 (12%、32人)

質問3. 今日の講座を受講して、大学在学中にもっと
このような講座での学習をしたいと思いますか。

①強くそう思う (11%、30人)

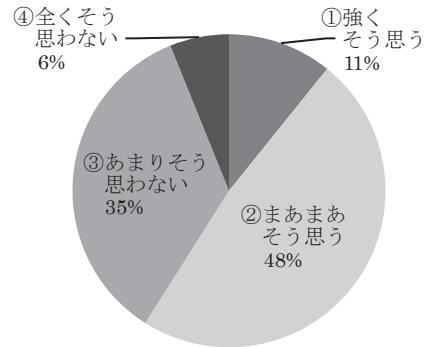
②まあまあそう思う (48%、134人)

③あまりそう思わない (35%、97人)

④全くそう思わない (6%、17人)

①+②の肯定的回答 (59%、164人)

③+④の否定的回答 (31%、114人)



質問4. 今日の講座を受講して、身近な周囲の人に薬
物乱用問題について注意喚起をすることができるよう
になったと思いますか。

①強くそう思う (18%、51人)

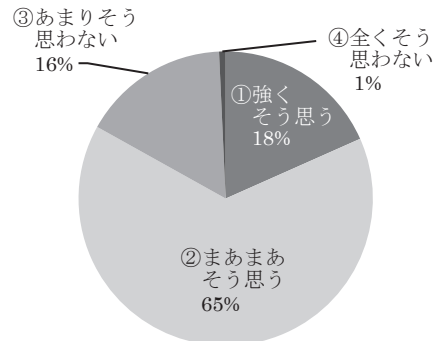
②まあまあそう思う (65%、180人)

③あまりそう思わない (16%、45人)

④全くそう思わない (1%、2人)

①+②の肯定的回答 (83%、231人)

③+④の否定的回答 (17%、47人)



質問5. 薬物乱用防止の意識を高めていくための提案や所見がありましたら下にご自由に記
述ください。

- 薬物はダメと思っていたけど、今回の講演で改めて理解した。もっと薬物について早期教育をして怖さや恐ろしさを伝える。
- ねずみの実験を実際にやってみたいと思いました！！
- 都会の方に行かないと、クスリは出回らないイメージがあります。
- もっとたくさんDVD見る。
- もっと深く知ることが大切だと思う。
- 子どもの頃からの教育の徹底
- 薬物を使いたいと思うのは、死にたいという前触れ？
- 薬物の危険を改めてわかった。
- ためになった。

- このような薬物乱用の授業を小学校からつづけていく必要があると思いました。
- ありがとうございました。
- 今回の内容は、そんなに意欲を持って聞くような話ではなかった。
- 実際にどのような影響があったのかという映像を見る。

IV. 考察

この研究では、入学後薬物乱用防止教育を受けたことのない女子大学の学部学生（2年生）に対して、キャリア教育の通常授業の1枠でその講座を著者が講師を担当して実施し、その直後に意識調査として書面調査を行った。著者は今回調査対象学部学生に対して普段の通常授業を行っていないため、初対面でありこのことから学生にとっては講師に対しての特定の先入観のないフレッシュな状況での受講となった。

今回の書面調査は、講座受講の直感的な率直な意識を調査することを目的としたため項目を絞り極めてシンプルな形とした。また、女子学生の全体の傾向を掴むため特定の学部学科に分けた上での授業や調査分析は避けた。

書面調査の結果、「質問1. 薬物乱用問題について、従来から興味関心は高い方でしたか。」に対して、①強くそう思う（19%、53人）と②まあまあそう思（69%、193人）を合わせた肯定的回答が6割（61%、168人）を占めたことから、今回の講座前から薬物問題についての意識が高い学生が多いことが分かった。次に、「質問2. 今日の講座を受講して、薬物乱用問題について新たな発見があり、理解が深まりましたか。」に対して、①強くそう思う（19%、53人）と②まあまあそう思（69%、193人）を合わせた肯定的回答が9割近く（88%、246人）にも達したことから、講座の内容が極めて有益と解釈されたと考えられる。その理由として、今回の講座は法令違反と罰則に重点を置いたものではなく、ヒトへの薬理作用を中心とした生理学的な内容を意識し、どのような保健衛生上の危害をもたらすのか、何故どうして使用してはダメなのかを根拠を示し理解してもらいやすいような工夫⁴⁾をしたことが影響したものと考えられる。「質問3. 今日の講座を受講して、大学在学中にもっとこのような講座での学習をしたいと思いましたか。」に対して、①強くそう思う（11%、30人）と②まあまあそう思（48%、134人）を合わせた肯定的回答は約6割（59%、164人）を占めたことから、継続学習意欲啓発の効果があったものと考えられる。「質問4. 今日の講座を受講して、身近な周囲の人に薬物乱用問題について注意喚起をすることができるようになったと思いますか。」に対して①強くそう思う（18%、51人）と②まあまあそう思う（65%、180人）を合わせた肯定的回答は約8割（83%、231人）と極めて高い割合を示したことから、薬物問題についての教育訓練の効果が反映されたものと評価される。質問5の自由記述ではその殆どが肯定的な意見であったことも合わせて勘案すると、今回の講座実施の意義は極めて高かったといえる。講座の内容が、生理学的な面を重視し、著者自らが企画し記録した動物実

験による異常行動も提示したことから、かなりのインパクトと説得力があったものと考えられる。その点が、警察関係者講師による法令根拠を重視しがちの講座との違いではないかと思われる。また、質問1を①強くそう思う又は②まあまあそう思うの肯定的回答をした学生の7割以上の学生が質問3で同様に①強くそう思う又は②まあまあそう思うの肯定的回答をしていたことから、当初の関心（恐らく大学入学前の学校教育等の影響）が、今後の学習意欲に強く繋がっていると考えられ、このことから大学入学前から継続して薬物乱用防止教育を行う意義は大きいといえる。

我が国の学校教育におけるこれまでの薬物乱用防止教育は、違法薬物の予防倫理的な考え方、すなわち法令に抵触する健康を著しく害する薬物として、危険性を過度に強調し、とにかく「使用してはいけない」「絶対ダメ」というキャッチフレーズを基に展開してきた印象が強い。時代が変わってもやって良いこと、悪いことをしっかりと教えていくことは学校教育の果たす重要な役割であること⁴⁾は当然のことである。しかしながら、薬物問題については、体験学習が不可能な領域であり、本当は身近な問題であるもそれを学ぶ側にとっては別世界のことと捉えがちで距離感をもって見聞きしてしまう傾向があることは否めない。

文部科学省は、薬物乱用対策推進地方本部全国会議資料⁵⁾の中で、学校教育における全国の薬物乱用防止教育の実施状況の割合をまとめており、それによると平成27年の時点で小学校、中学校及び高等学校でそれぞれ76.2%、88.9%及び84.6%に達しているという。また、第四次薬物乱用防止5か年戦略（平成25年8月薬物乱用防止推進本部決定）³⁾によれば、その達成目標の一つとして、青少年、家庭及び地域社会に対する啓発強化と規範意識向上による薬物乱用未然防止の推進を掲げ、学校における薬物乱用防止教育及び啓発の充実強化の推進として、「薬物乱用防止教育の内容及び指導方法の充実」「薬物乱用防止教室の充実強化」「学校と警察等関係機関・団体との連携強化」「大学等の学生に対する薬物乱用防止のための啓発の推進」を謳っている。また、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の改善については、薬物乱用防止教育の充実のため「体育」「保健体育」「道徳」「特別活動」における指導に加え「総合的な学習の時間」も活用しながら学校の教育活動全体を通じて指導すること、高等学校においてはさらに平成21年3月に改訂された高等学校指導要領「保健体育」において、麻薬、覚せい剤に加え、新たに大麻を扱うものとし、大麻の有害性・危険性に関する指導を充実させることとしている。このように、国としては薬物問題が差し迫った問題として学校教育の充実を強く意識していることは理解できる。ただし、気になることは、第四次薬物乱用防止5か年戦略で「大学等の学生に対する薬物乱用防止のための啓発の推進」の指摘があるものの文部科学省において大学等の高等教育機関での薬物乱用防止教育の実態と実施状況は把握されていない点である。

以上のことから、薬物乱用防止教育は社会に巣立つ前の学校教育の果たす役割は大きく、その教育は小学生から大学生に至るまで繰り返し継続的になされて行くことが重要^{6)、7)}で、

その実施方法は、法令違反を意識した罰則・禁止教育ではなく、生理学に基づいた理解教育を重視すべきである。また、その教育は単に法令違反の薬物乱用問題だけではなく身近な通常医薬品の誤使用や乱用問題と絡めて学ぶことが重要である⁴⁾。しかも、高等教育機関の学生にはその集大成としての説得力のある教育が提供され、特に昨今の社会で活躍する女性の急増を鑑み、学びの成果が女性としての感性が反映され社会における薬物問題の保健衛生上の危害防止に繋がることを期待するものである。

V. 謝辞

本研究を進めるにあたり、調査にご協力頂いた女子大学関係各位に深謝する。

VI. 参考文献

- 1) 内閣府薬物乱用対策推進会議、第四次薬物乱用防止五か年戦略（平成25年8月）、(2013)
- 2) 文部科学省、薬物乱用防止教育の推進について（通知）（平成28年1月28日）、(2016)
- 3) 文部科学省、大学生等に対する薬物乱用防止のための啓発用パンフレットについて（平成29年3月21日）、(2017)
- 4) 宮田篤郎、薬理学の教育による社会貢献、日薬理誌、149、(2017) pp.63～64
- 5) 内閣府、薬物乱用対策推進地方本部全国会議、資料7薬物乱用防止教育の推進について〈文部科学省〉、(2016)
- 6) 文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課：薬物乱用防止教育の推進について、(2016)
- 7) 松本禎明、坂井留美、三島健一、江頭伸昭、岩崎克典、藤原道弘、大麻の乱用防止と高等学校教諭の意識に関する研究、九州女子大学紀要第46巻2号、(2010) pp.131～150

The prevention of drug abuse education in women's university

Yoshiaki MATSUMOTO

Advanced course of child care and education at Kyushu Women's Junior College

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

ABSTRACT

A drug abuse problem is a pressing problem in our country. Improvement of the university rate of students receiving higher education conscious of female professional development in recent years, it influences, and, social advancement accelerates and the situation by which a female is playing an active part about equality or any more status with a male is also increasing.

So I decided to do implementation and an attitude survey of a drug abuse prevention educational lecture targeted for the female students who learns by the department which are higher educational facilities by this research. The kind of cannabis, stimulants and dangerous drug, the dependence and a domestic and abroad crime example were introduced by a slide and animation televising of the animal experiment landscape was performed in the lecture.

There were a lot of affirmative opinions by the item item of the place and everything where a document investigation was put into effect about the degree of the interest interest, the profitability of the attendance and 4 items of the future's desire to learn and the careful awaking posture to the close person from the past by an attitude survey after the lecture. The profitability of the attendance of this lecture could get very high evaluation in particular, and high positivism was also seen about the careful awaking posture to the close person.

Keywords : prevention of drug abuse, education, female students, university